響

水野仙子

青空文庫

一

藤村の羊羹、岡野の粟饅頭、それから臺灣喫茶店の落花生など、あの人の心づくしの数々が、一つ一つ包の中から取り出されつゝあつた。——私はゴム枕に片頬をつけたまゝ、默つてお蔦が鋏をもつて糸を切るのから、その糸を丹念にくるくると指の先に巻いて、薄紫と赤と青との切手の貼られた送票を丁寧に剥がしたりしてゐるのを、もどかしく眺めてゐた。けれどもそのもどかしさに何ともいへぬ樂しさがあるのを思つて、私はせかずにぢいつと堪へてお蔦の手許をみつめてゐた。書簡箋、小形の封筒、そんなものを順々にお蔦が私の枕許に並べたてた。その時、それらのものゝ間に隠れるやうに挟つてゐたオレンヂ色の表紙を持つたこの小さな手帳を、私はふと手をのべて自分の蒲團の上に取つたのであつた。片手の指先でぱらぱらと繰ると、弾力のある紙は大いそぎで優しい薄桃色の線を綾に亂して伏せていつた。私は何となくこの手帳が氣に入つてしまつた。そしてすぐに萬年筆の鞘をぬいて、そのオレンヂ色のおもてに「響」と題を打つたのであつた。けれどもそれは、別にどうといふ意味を持たせたつもりではなかつた。たゞその時、左を下にして横つてゐた私の心臓の音が、とつとつとつとしづかに枕に響いてゐたのを、ふとそのまゝ紙の表に印象させたまでの事であつた。

けれども、私は別にこれぞといつてこゝに書かなければならぬ事を持つてゐるのではない。

毎日毎日、或は瞬間に、或はかなり長い間連續して、さまざまな思は私の心を過ぎて行く。それらが或は歌といはれるもの〻形を取る事もあれば、詩ともいふべきリズムを持つた獨語（ひとりごと）である場合もある。けれども敢てそれらを書きとめて置いて私の何になるだらう？　やがては消えてゆくべき命であり、姿であるものを……私の心臟の響がはたと絶えた時、最もよくそのすべての意味を語るものは、何も書かずにのこされたこの白紙であるであらうよ！　すべてを書き遺すにしてはあまりにこの思が多過ぎる……

さらば愛も、憎も、惱も、苦もよ、今暫くが間であらうほどに、私の胸が張り裂けるまでは、お前達の棲所（すみか）として、私はこの心臟を提供する。それらのものが、私のものとしてこの世にある間のしるしは、日毎夜毎に枕を傳うて我とわが耳に入る、あゝこの響である……とつとつと……

（かう、序のやうなものが、その手帳のはじめに書かれてあつた。それは昨年の秋の頃、廿七で死んでいつたある人妻の、たつた一つの遺稿——ともいふべきものであつた。彼女は生前相當な文筆を持つてゐたのであつたのに、自分の病が到底起つ事が出來ないのを知つてからは、時たま極めて僅な人達の間に書く手紙以外には、決してものを書かなかつた。それは書く事がなかつたのでも、また書きたくないからでもなかつたのだと私（作者）は思つてゐる。それは書きたくて書きたくて仕方がなかつたからこそ、その願があまりに強くあまりに大きかつたか

らこそ、彼女は書かなかつたのだと私は思つてゐる。書き遺すほどのものならば、書いて書いて書きぬきたい、けれどもそれにしては、彼女の息はそれに伴ひ續かなかつた。その爲に、最初のうちは彼女は頻に悶え苦しんだ。けれども、それは苦しめば苦しむほど、却つて惱ばかりがありありと殘されてゆくのを悟つてからは、ふつつりと思ひ諦めたやうに、彼女は絶えてものを書き綴るといふ事がなかつた。さうしてその折々に浮んで來るさまざまな思を、その折々の去來にまかして、語る人もない故郷の寂しい田舍で堅く口を結んで一年あまりの年月を送つたのであつた。この「響」はその間に書かれたものらしく、日記やその他の書き反古は前にすべて燒かせてしまつたとかで、これだけがやつと枕許から發見されたのであつた。それは大方みな白紙であつた。それは彼女の日記でもあれば、感想録でもあるところの、意味の深い白紙であつた。私がその夫なる人と共にこの手帳をひらいて見た時、めくつてもめくつても出て來る白紙は、却つてあのをはりに近い頃の沈默と微笑とを、それからそれを獲るまでの長い長い間の苦悶と葛藤とを、最もよく雄辯に語つてゐるとしか思はれなかつた。たゞこの手帳のおしまひの方に、恰も何かの例外のやうに、次に録するやうなものが全文書き込まれてあつた。それは彼女の從姉へと書かれたものであつた。それを見ると、現代の相當な教育を受けたある年輩の女の、妻の、さうして死といふものをみつめてゐる人の、ある心持がしみじみわかるやうに思へるのである……）

二

あたゝかうわれを見おきて雪風のあとさびしらに去にし君はも。

寂しさはいつもあの人の後姿に殘る。そのマントの肩といはず裾といはずに、雪は亂れ亂れてあとを追うたであらう。見送る事も叶はなくて、いつぱいに開いた瞳を硝子戸に置いてゐると、雪は狂ふやうに降りしきつてゐたつけ、その日は早くも先へ先へと流れていつてしまつた。

今夜は、いつもあの人が見えて歸つた後暫くの、寂しいおちつきの氣持のうちにゐる。病氣以來の並並ならぬいたはりを思ふにつけ、我儘ばかりしてゐた昔の苦しい記臆をのみのこして、何の酬ゆるところもなく離れて行かなければならぬのが濟まなく佗しい。けれども考へても考へてもすべては考へきれない、それは考へ盡したも同じ事なのだ。にも拘らず私はやつぱりいろんな事を考へてゐる。それはやがて來る嚴なるものゝ前に、いかに造作なく崩れ去るものであらうとも、いろいろな色に塗られた積木を、弄ぶとは知らずに幼い建築を企てる子供のやうに、私はやつぱりとかくこの胸に不思議なやうな樓閣を築いたりしてゐる。寂しければ寂しいやうに、悲しければ悲しい姿に……

この頃ふとある考が私の心を捉へて放さない。それも不思議な樓閣に棲むやうなものゝ一つであるかも知れないけれど、ともかく私の心はその考に促されて止まない故に、私はしづかに百合さんにそれを書いて置かうと思ふ。

百合さん。

この手紙が他日私の亡いあとあなたのお目に觸れる事があつても、どうか死者に對した時にありがちのあらたまつた心持や、何となく感じるものである義務の念やに支配されずに、どうか自然な心持で、まだ生きて丈夫でゐる私のたよりの一つだと思つて讀んで下さい。それでないと却つて、私があなたにお話しようとする心持が、その自然さを失つて、この手紙の命を失つてしまふ事になりますから。

そして百合さん、たとへこの手紙が書置の形式をなすとしても、敢て告別の言葉をこゝにくだくだしく書き遺しますまいね。それはたゞ後に殘つた人の情緒をそゝつて、徒なかなしみを湧きたゝせるに過ぎませんから。おわかれなら多分もつとそれの適當した場合にする事が出來ませう。多分恐らくもう一度はあなたにもお目にかゝれる事が出來ると思ひますから。よしやまた私の終が意外に早く突然に來て、あなたにも誰にもお目にかゝられなかつたとしても、私のつめたくなつた唇は、その時却つて最もたしかに左樣ならを語るでせう、なぜならば、それが一番最後のほんとの左樣ならですから。私はあの二度目の咯血以來といふもの、毎日世と人とに向つて一つづつ左樣ならを繰り返して來ました。今も毎日心から眞面目にそれを繰り返してゐます。

私の用意はもう既に成つてゐます。どうしてもかうしも避けられない爲に、せめては慌てな

いまでに整へなければならぬその用意が。けれどもあの捕捉すべからざるもの――死の姿――が、もはや、私を苦しめはしないけれども、絶えず私の身邊に漂つて、一所懸命にその姿をはつきり掴まうとみつめてゐる私をなやまし疲らせてゐます。私の眼は、もう地には向いてゐません、たゞひたすらにあの、覘かうとすれば隱れ、掴まうとすれば消えて行く姿に向つて、いつぱいに目を見ひらいてゐます。もうそこより外に私の目の向けどころはないのです。そして一歩一歩、それに向つて近づいて行くに從つて、不思議にも心の苦痛やなやみは一歩づつ後もどりをしてゆきます。依然として私を招ぐ姿は暗くおぼろではあるけれども、私の心は決してそれを厭ふどころか、あるなつかしみをすら持つて迎へ、また手をのべてゐます。美しい幻影をもつて冷い現實の墓場に葬る事の悲しさに泣いた心は、もう古い脱殻のやうに、私の心の片隅に押し寄せられて、ひたすらに眞實を見ようとする願に胸を抱いてゐます、極めて柔順に、極めて謙遜に。そしてその眞實は、今の私に取つてはどうしても、間もなく私のために來る死と結び合つて離す事が出來なくなつてゐます。それ故今私がどんなに澤山の淚を流してゐようとも、もはやその淚は私の悲や苦をあらはすものではなくなつてゐます。これは名づける事の出來ぬ、自然な、たゞ靜に流れる淚です。

けれども百合さん、かうしてもう自分自身のために泣く必要のなくなつた私も、遺されたものゝ悲哀を思ふ時には、まだまだやつぱりこの二つの眼に堪へ切れぬ熱い淚がこぼれます。それは月日と共に薄れゆき、いつかは忘れ去られるものではあつても、死んで逝くといふ事が私

一人の出來事にとゞまらずに、多少に拘らず、或は一時にもせよ、ある打撃を人の上にのこしてゆかなければならないといふ事は、私に取つてはほんとに辛く苦しい事です。

三

死別の哀苦は、逝くものよりも、感じやすい心と共に殘るものゝ方がどんなにか強く生々しいことでせう、あなたはようくそれを知つてゐらつしやるのですね。私は覺えてゐます、あの時のあなたのあの激しい嗚咽を……それはもう、まだついこの間のやうだけれど、もう三年にもなりますね。

弘一さんの靜な骸を納めた寢棺で、燒場へと行くためにあの鎌倉の家の門を出たのは、氣の短い冬の日が、一秒の猶豫もなしにさつさと暮れていつた頃で、世話人の振り翳す提燈の火影で漸く、人々の顏がそれと分るやうな時でした。ぎしぎしと重々しい、けれども寂しい音をたてゝ、白木の棺は私の俥の脇をすれずれに通つて先の方へ行きました。幾臺もの俥が置かれた順序なりにそれに續かうとすると、『どうぞ御緣の近い方からお先に願ひます、御緣の近いお方は前の方にいらして下さい。』と葬儀屋の男が呼んでゐるので、俥は暫く車上の人の指圖のまゝに入り亂れました。亡き人の妻の從妹としての私は、血筋をひいたと思はれる人々の後に遠慮深く俥を入れさせて、しづしづと動いて行く行列に續きました。振り返つても見なかつた

けれど、けはひではもう二臺ばかりが私の後に續いてるやうでした。私はあなたがどの邊にいらしたのか、恐らく棺のすぐ後に從つたのでせうけれど、少しも知りませんでした。私はなるべくなるべくあなたと顏を眞面目に向き合せるのを避けてゐました。あなたの眼を見る事が私には辛かつたのです。あなたの眼は私の淚を誘ひ、私の淚はあなたが一所懸命に支へてゐる淚の堰を危くするだらうと恐れたのでした。私は人知れず多勢の中から、絶えずあなたの姿を求めまた追うてゐました。あのかなり複雜した親戚關係の人達に圍繞されて、あなたは實に雄々しく、僅な事にも氣を配つて亡き人の遺志のために戰ひながら、立派に振舞つてゐました。その取り亂さない姿が、私には一層悲しくかはいさうに見えました。私ははじめからしまひまで俥の上で泣き通しでした。なぜこんなに泣くのだらうと自分で自分を怪しむ程泣けて泣けて仕方がありませんでした。それはあなたに對する同情と同感とが、人事ならずひしひしと感じられたからで、私に取つては半分はもう自分の打擊であり悲しさであつたのでした。やがては自分にもかうした境遇がめぐつて來るのだといふ考が、どうしてもこびりついたやうに頭から離れないで——今から考へるとをかしいやうだけれど、あの頃はAがわるかつた時分でせう、そして私は元氣でぴんぴんしてゐたのですから、私はすつかり自分が遺されるものだとばかり思ひ込んでゐたのでした——もう既にその時が來たのでもあるかのやうに、あなたの哀痛と私のそれとが一所くたになつて、又その癖百合さんがかはいさうだかはいさうだと始終胸の中で呟きながら、闇の夜の俥で誰にも顏を見られないのを幸ひ、ひた流しに淚を流しながら運ばれて

ゆきました。一生の中で……と、もう言つても差支ないでせう、あんなに泣いたのは、お父さんお母さんのなくなつた時とあの時とだけで、あの時はお父さんお母さんの時よりも、もつともつと泣いた位に私は記臆してゐます。それはそれだけ私達が大人になつて、いろいろ憂きくるしみを實際に知つて來たからなのでせう。

かうしてあの暗い野道を、車夫達は掛聲から掛聲を送りながら、あの暗い險しい寂しい火葬場のある山の下に着きました。私達はそこからみな徒歩(かち)になつて、おぼろな弓張提燈の導くのをたよりに、足許に氣をとられながら、揉まれ揉まれてのぼつて行く棺のあとに續きました。あゝ何といふはつきりした記臆でせう、あの寂しい夜の光景は！

太々しい怖い顔の隱坊から火室の鍵を受け取つて、それでもあなたはなほ念を入れて改めるやうに、その實は離れ難なく、弓張提燈を振り翳して、あの氣味のわるい火室のぐるりを一週しました。現在その手で口火をつけて、現在その手で夫の遺骸を燒くその焰の音が、煉瓦に圍まれた不思議な世界の中に、耳を欹てるまでもなくはつきりと聞えてゐました。生と死との歷然とした區別が、煉瓦一重の中と外とにありました。死の方は冷く、生の方は暗かつたのです。鐵の扉を固く閉されて、中の火影が糸よりも細くちらちらと洩れてゐました——何と思つたかあなたはぴたりと扉の前に立ちどまつて、既に下された錠に手を掛けてそれをゆすりました——『大丈夫ですよ奥樣、鍵はこのとほりこちらで預りましたんですから、明日お骨上げにおいでになるまでは誰だつて開ける事が出來ません、それにこの人が一晩寢ないで番をするんです

から……』と、こゝまでもついて來た葬儀屋の男が、時に心付といふ意味をふくめて言つた時、あなたがどんな氣がなすつたか私はよく知つてゐます。それだのに人々はもう先刻から外に出てあなたを待つてゐました。さあと促されて、一歩片足があの火屋の閾の外に出た時、『わつ！』といつてあなたは突然體を二つに折つてしまひました。たうとうかなしみの極で堤が切れてしまつたのでしたね。その刹那あなたの程近にゐた私は、いきなり自分も共にわつとなつて、あなたを抱きしめたいと思ひました。けれどもやつぱりそれを堪へました。あなたをしてそこで思ふさま泣かせる事の出來ないのを口惜しくかはいさうに思ひながら、私はたゞ默つて、冷く瀧のやうに流れるものを拭ひもあへずに、あなたの袂の先を掴んで思ふさまそれを握りしめました。その袂を強く引く事すらも敢てしなかつた私を、ハンカチでぴつたりと顔を押へてゐたあなたは恐らく今まで御存じがなかつたでせう。あなたが顔をあげた時には、みんながびつくりしてこちらを振り向いてゐましたので、佐瀬家の親戚としては全く存在を認められない位の私が、こんなにも泣いてゐるといふ事を恥かしく隱すやうな氣持で下を向いてゐましたから。その時は私の持つて出たハンケチと鼻紙とは、殆どもう用をなさなくなつてゐました。それで私は暗いところに行くと、しきりに顔を手で拂ひ指で拭ひしてゐました。

四

あなたに取つてこれはよしない事を言ひ出したのかも知れませんね、けれども何も彼も私に取つてはお名殘であるといふ事によつてどうか許して下さい。毎日かうして少しづつ少しづつなけなしの精力を盡して書き續けたのも、遺して行く人のために殘る思がそれをさせるのです。愚にも夫に先だたれるものとばかり思つてゐた私が、二年とたゝぬ間に思ひもしなかつたこんな病氣に罹つて、今はその命も消えゆく燈火のしづかなゆらぎをしてゐるとは、今更に寂しい微笑がこの色褪せた唇にのぼります。かはいさうなものは人間ですね、なんにも知らないで、ほんとになんにも知らないであくせくと……けれども、今はそれでいゝのだといふ事がやうやくわかりかけました。自分の運命を知るやうになつてからはもうおしまひです、それを確實に知るやうになつては。今の私ですらも、まだまだどうかすると萬一を思ふ心があればこそ、かうして人間のお仲間入をしてゐる譯なのでせうが、死ぬ事を知るのではなくて、死そのものを——それこそあの捕捉すべからざるものを——しかと知り得る時には、人はもうその死に融和し、合體し、いやいや既に「死」そのものとなつてゐます。「死す」といふ事は何といふ簡明な、それでいて動かす事の出來ない、かはりを用ゐる事の出來ない力でせう、間一髪を入れない、迅速な、明確な、おごそかな、極めて弱くて極めて強い力ではありませんか……「死す。」

死といふ事を無暗に問題にすると思はないで下さい、それを考へないではゐられないのだと思つて下さい、自分の爲にも亦あの人のためにも。私自身についてはどうやら解決がついたと思つてゐます、それが間違つてゐるか間違つてゐないかは別問題として。たゞ私の亡いあとの

あの人のために、私は今さまざまに思ひ量つてゐます。恐らくこれは餘計な事でせう、來年の事を言つてすら鬼が笑ふと云ふのに、まして死にゆく者が生きて殘る人の生活に干渉するなんて、ほんとにいらざるおせつかいです。ですけれども、さう思ひながらやつぱりいろんな事を考へます。自分でもそれが空想で、決して事實はそんな風になつてゆくものではないといふ事を百も承知しながら。ではそれは私の遊なのでせうか、いえいえ決してさうではありません。たゞ私は、せめてはあの人の上にかくあつてほしいと思ふ事を思ふばかりなのです。それを願ひはするけれども、神樣にだつて運命にだつてそれを請求しようとはさらさら思ひません。瞑するものはたゞ目をつぶりさへすればそれでいゝではないか、その默從の外に私の爲すべきことはない筈と、頭ではよく心得てゐますもの。

けれども百合さん、その時が來るまでは、やつぱり哀れな人間の本性として、とやかくくだらぬ思ひやりや思ひ過しをするものだと見えます。氣にしないといひながら氣になるのですね、何だかあの人の姿が寂しさうです。春になつたらどうしよう、夏が來たらどうするだらう、秋が來たら、冬になつたらと、些細な日常生活の事まで、自分がない後の事を氣にする私を笑はないで下さい。親が無くても子は育つといふ譬がある位ですのに、殊に大の男一人を何と心得てゐるのだと人は笑ふかも知れません、けれども百合さん、どうかあなたゞけはそれを笑はないで下さいな。

つくづく省れば、私はあの人に取つて決してよい妻ではありませんでした。それにも拘らず

あの人は當分寂しくなるでせう。幸か不幸か私達の間は一人の子供すらもなかつたので、あの人は全くのひとりぼつちとなります。自分が愛された事を信じてやすらかに眠つてゆく事の出來る私は、死ぬといふ事が自分一人易きにつくやうで、何だかそれが心苦しくて仕方がありません。せめては私の亡い方が、あの人の生活に取つて、藝術にとつて、幸福であつてくれるやうに！　さうでなかつたら、ではどうかよりよき者があの人のために與へられるやうに！　私は少しも無理な心持なしにそれを願つてゐます。そしてもしも死後の生活に於てこの世の消息を知り得る事が出來たならば、あの人がどんなに他の女を愛しようとも、それがあの人を慰め、また幸福にするのならば、私は喜んでその二人のために祈るでせう。

　爭も、嫉妬も、憎しみも、さうした陰なる醜い感情は、命に先立つてだんだん私の肉體をはなれつゝあります。すべてが私を見はなして行く……たゞどうかこの愛だけは、最後までも、願はくばその骸にまでも踏みとゞまつてくれ！

　寂しい世ではありました。私に取つてそれは廿六年間、樂しい事も嬉しい事もすべてつきくるめて人世は寂しかつたと思ひます。私達は又貧しかつた。けれども燃えて盡きる事のない愛の焔でお互が温め合ひました。ある時は濕り、ある時は突風の危機に遇つて、僅に消え殘つた事もありますけれど、そしてそれを私達は最初ごくわづかしか持つてゐませんでしたけれど、いろいろな艱難や寂しい目に遇ふ度にだんだん、だんだん焔は強められて行きました。お互に援けあひ暖めあはないで、どうしてこのなやみの多い世に滿足して生きる事が出來ませう、そ

れだのに今あの人はその伴侶を失はうとしてゐます。

五

あなたの籍も、たうとう籾山にかへりましたのですつてね、勿論弘一さんを喪つてからの佐瀬家にあなたの執着はない筈ですけれど、夫の姓を捨てる事の苦しさ寂しさはどんなであつたらうかとお察してゐます。あの家は決して操正しい寡婦のとゞまるに適當した家ではなかつたけれど、體は實家に寄せながらも、いつまでも佐瀬の姓をあなたは名乘るつもりでゐらしたのにね。あなたの行末を思ふ伯母さん從兄(にい)さんの深慮は、既にあの不幸當時からその事を考へてゐらしたのでせう。いつぞや伯母さんが弘一さんのお墓の前でかう仰しやいました。『彼女(あれ)がね、この石碑をたてる時に、どうしても自分の名前も一所に刻むのだと言ひ張つて聽かなかつたんですよ。ですけれども純太郎が、それは斷じていけないつてね、許しませんでしたけどもね……』伯母さんも目にいつぱい涙を溜めてゐらしたつけ。

思ひのまゝにならぬのが世の中だとは言ひながら、よしない再緣のすゝめに困じ果てゝ、獨立の道をひそかに搜してゐるといつかのあなたのお手紙にありましたが、ほんとにあなたの運命もどうなるのでせう、まだ達者で元氣なお母さんと立派な兄さんとを持ちながら、あなたもやつぱり寂しい人ですねえ。到底自分には忘れる事の出來ぬ亡き人の思を抱いて、再び人に嫁

がうとは思はないと仰しやつてゐるあなたの心を私は嬉しく思つてゐます。けれどもそれは何といふ悲しく寂しい生涯でせう、あなたがその境涯に堪へ得るかどうかなどゝいふ事は決して問題にしないでも、私はあなたの再婚に就いて考へてみたいやうな氣がしてゐます。

もしもねえ百合さん、あなたが大事に大事に胸に抱いてゐるその思に、少しも手を加へる事をしないでも、そしてその爲にあなたの良心が責められるゝ事なしに出來る結婚があるとしたら、それに就てはどうお思ひになりますか。勿論さうした場合は、やはり同じやうな心の狀態にある人との間に於てのみ可能な事です……明敏なあなたはもう既に私が何を言ひたいと思つてゐるのかお察しになつたでせうね、どうか惡く思はないで下さいな、そして願はくば死者の口に耳を寄せてものを聞かうとするやうな注意をもつてこの事を考へて下さいませんか。はじめからそれが無理な事だとはわかつてゐても、無理は無理かも知れませんけれど、しかしそれは理不盡な事でも、また決して不自然な事でもないだらうと私には思はれるのです。運命の仕事には決して不自然といふ事がありません。たとへ不自然に見える事があつたとしても、よくよく辿つてみれば、その不自然らしく見えるのが却つて最も自然な狀態である場合がよくあります。

私は今運命といふ言葉を使ひました。さうした考が、恰も暗示のやうに私の腦裡を過ぎていつたものですから……けれどもこれを具體的な話にして見た時に、何といふそれは突飛な思ひつきでせう、もしも伯母さんがこんなことをお聞きになつたら、あきれておしまひになるどころか、きつと『人を馬鹿にしてる！』とお腹立になるかも知れませんね、伯母さんは私達の貧

乏を憐れんでは下すつたけれど、私達を祝福し、またあの人を認めては下さいませんでした。あの人は全く社會的には地位もない、財産もない、たゞ一介の貧乏な繪かきに過ぎません。そして空しき名聲は勿論のことまたその藝術に大天才の閃をもつてゐる譯でもありません。けれどもあの性格の中に持つてゐる純眞なものが、やがてはその藝術を清め、小さければ小さいだけの眞實をそこから見出し得る事だらうと私は思つてゐます。そして人間としての生活を誰に憚るところもなく、また恥づる事もなく、靜に寂しく生きて行く人です。體の方も私とは反對にだんだんだん丈夫になつて行くやうです。私はそれを何より嬉しく、涙ぐましく見まもつてゐます。

けれどもかうした人が、あなたの行末を相當な富と地位とで固めようと心配してゐられる伯母さんや從兄(いい)さんに取つて、一顧の値もない事をよく承知してゐながら、そしてそれをちつとも無理だとは思はないで、猶且こんな考をあなたに打ち明けるといふのは、私もよつぽど夢想家ですことね、たゞ小さい時からの仲よしで、同い年のせいかよく氣があつて、大抵何事にも私に同意し、また理解してくれたあなたを信じ、百合さん、あなたゞからこそ安心してこんな取りとめもない事を書き置いて行くのですよ。私はあなたを自分の半身のやうに心得て、しかも私の短所を補ふものをあなたがふんだんに持つてるだけに、そのよりよき半身に私はあの人を托して行きたいと、勝手な事を空想したのです。

もしもこの事があなたを侮辱する事に當つたらどうぞ堪忍して頂戴。私は決してこの事をあ

なたに強ひるのでも、お願するのでもありません。たゞもしもどうかした運命でそんなことにもなつたらばと、私の夢をお話してゐるところなのです。どうか責任をもつてこの手紙を讀まないで下さい。そしてあなたの自由意志をもつて、あなたのこの後の幸福に就いて敏感であつて下さい。

誰でもこの世に心強く生きるためには、一つのなぐさめが必要な筈です。それは人によつてその求めるものが違ふとほりに、そのなぐさめも違ふでせうけれど、貧富を超越してお互に容し合ひ援け合ふ愛のなぐさめこそは、一番揺ぎのない力だらうと私は信じてゐます。そして夫妻の結合が、お互に最初であり最後であられる人は何よりも幸福です、けれども大抵は皆その胸に一度半度の愛のいたでを受けてゐます、この事はどう思つても寂しい事ではありませんか、悲しきは誰しも遂にその運命に支配さるゝ人間であるよ！　せめてはお互に何事をも容しあひ、慰めあうて、更にそこから生れて來る愛の泉でその傷を洗はなくては！

六

私の大ずきな愛する從姉の百合さん、もう左樣ならにしませうね、どうか幸福で送つて下さい、私が死んでもあんまり力を落さないで頂戴。あなたの純な心持をいつまでも失はないやうに祈ります。この手紙を見てしまつたら燒いて下さいね、あなたに打ち明けた私の心持は、あ

なたの自由を縛らないやうに私自身片つぱしから忘れて行く事にしませう、大きな大きな忘却が來るその前に。

すべては導くものゝ手にあるのだけれど、もしもあなたを眞に幸福にする縁があつたなら、皆樣の安心のためにも再緣なすつた方がよくはないかと思ひます。今更つれない事をいふとお思ひかも知れませんけれど、獨身で過さうといふ事があなたに取つて自然な安易な心持であるならば、寂しいといふ事を不幸のうちだとは思つてゐない私は、その心持を踏み躙つてもおすゝめはしないけれど、もし死者に對する感情とか義理とかいふものがそれを阻むのだつたら、それは無益な事だといひたく思ひます。もしもあなたが死者から嘗て愛されてゐた事を信ずるならば、安心して幸福へと導く手に腕をまかせてよいと思ひます。死んでゆく者は、たゞたゞわが愛する者のより多く幸福である事より外は思ひのこさないのですから……

書けば書くほど名殘が惜しくなつて來ます、胸がいつぱいになつて來ます……それでは左樣なら！……

一九一六年一一月　澄子

青空文庫情報

底本：「叢書『青踏』の女たち　第10巻『水野仙子集』」不二出版
　　1986（昭和61）年4月25日復刻版第1刷発行
底本の親本：「水野仙子集」叢文閣
　　1920（大正9）年5月31日発行
入力：小林徹
校正：田尻幹二
1999年4月29日公開
2006年4月20日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

響

水野仙子

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/